



ケンブエルの謠つた詩

山岸光宣

洋学文庫  
文庫8  
E 38  
3

徳川三代將軍家光の寶永十六年（一六三九）に一般西洋人との通商貿易は嚴重に禁止されたが、その後引續いて和蘭人にだけ通商を許されてゐたので、始めは平戸に、後には長崎に和蘭の商館が設けられてゐた。それ故に和蘭商館は通商上の特權に對する感謝と、將軍に對する敬意を表せんがために、始めは毎年一回、後には五年毎に一回づゝ、商館長の所謂甲比丹が遙々江戸幕府を訪問した。始めはさうではなかつたが、後には（慶安二年（一六四九年）以後）甲比丹はこの際書記の外に醫師をも帶同した。恐らく醫師は他の者に比して學術の造詣が深かつたので、日本醫學の進歩を促すにも、またその他の西洋科學を日本に紹介するにも、好都合と考へたからであらう。斯くの如く醫師は西歐の科學を代表するも

のであつたから、和蘭ばかりでなく、廣く諸外國にまで亘つて人材を求めたので、その中には瑞典人のテューンベルイの外、獨逸人では、クライエル、ケンブエル、ジーボルドなどがあつた。醫師として始めて我が國に渡來した獨逸人は延寶三年（一六七五年）のクライエルであつて、既に日本の植物を蒐集してこれに關する著述をも發表したが、日本を初めて正確に西歐に紹介したものは、ケンブエルであるといつてゐる。

エンゲルベルト・ケンブエル (Engelbert Kämpfer) は一六五一年獨逸のレムゴといふ町に生れたのであるから、元祿三年（一六九〇）日本へ來た時は三十九歳であつた。當時はまだ和蘭甲比丹が毎年江戸へ參府したので、ケンブエルは元



祿四年(一六九二)とその翌元祿五年の二度これに随行するの光榮に與かつた。彼の『日本志』(Geschichte und Beschreibung von Japan aus dem Originalschriften des Verfassers, besg. von Christian Wilhelm Dohn zu Lemgo. 2 Bde. 1777-79.)には、江戸参府の有様から日本歴史や風俗習慣等、彼の日本に關する見聞知識の一切が網羅されてゐる。及びその他の人々の記述を綜合して見ると、天和二年(一六八二)甲比丹の江戸参府の時から、甲比丹が將軍へ謁見の嚴肅な儀式が濟んだ後で、一行は更に幕府の大奥へ呼び入れられて、第二の謁見の行はれるのが例となつた。最初の天和二年の時、五代將軍綱吉の御世繼の徳松君の餘興として、和蘭の歌舞が所望されたが、甲比丹の一行は恐縮して御斷り申上げた。この時隨行した和蘭通詞の本木庄太夫榮久が自らつと立上つて誦つたり舞つたりしたので、和蘭人達も續いて舞つたり誦つたりした。爾來これが例となつたのである。ケンプエルが元祿四年江戸参府の折の見聞経験を記すところによると、この時綱吉將軍の奥方や奥女中達とが和蘭人一行を御覽になるので、將軍も貴婦人達と共に御廉の背後に隠れて居た。それで和蘭人一行は將軍の方に向つて先づ日本流に敬禮して、床まで頭を屈めて躡きながら進むと、御側用人

の牧野備後守が將軍の命により、通詞を経て歡迎の意を述べた。これに對して甲比丹は和蘭東印度會社長官の名に於て敬意を表し、また和蘭のみに通商貿易を許された恩恵に對して感謝の辭を述べると、通詞はこれを日本語に翻譯して繰返へした。これで第二の謁見の儀式が濟むと、嚴肅な大奥は忽ち滑稽な芝居の場面に一變した。先づ一行の各々に對して、別別に年齢や姓名を問はれたが、更に甲比丹に向つては、和蘭から東印度會社の根據地のバタヴィヤまでの距離や、バタヴィヤから長崎までの距離を問はれた。それからケンプエルには種々の病氣の中で最も危険なのは何かとか、また癌腫や潰瘍の治療法とか、西洋にも不老長生の靈藥があるかといふやうなことが尋ねられた。それはまだいゝとしても、將軍は更に和蘭人に向つて、立上つたり、あちこち歩いたり、互に挨拶したり踊つたり、はねたり、また酔つばらいの眞似をしたり、日本語で片語をいつたり、畫を描いたり、また和蘭語や獨逸語で歌を誦ふやうに命ぜられた。この時ケンプエルの誦つた歌は、『日本志』の獨逸語版の脚註に出でゐる。それは八行五聯から成立つたもので、意譯すると次の通りである。

一。われは忘れじわが務。なびくとも見えざれば、思ひ亂れしわれながら、真心こめて恐れずに、天津日の光に

かけて、誓を立てし少女こそ、大地の果に至るとも、永久に忘れんことやある。

二。われ何をかいはん、務も責も。誓もまた謙辭をも。御空なる神の恵の、汝が美しき委と、いづこにも比ぶものなき、汝が徳こそは、われを結ぶ鎖、またわれを止むる牢獄なれ。

三。嗚呼われいかでか、天津少女を忘るべき。遠き砂濱の果てにても、なかは思ひに耐ふるべき。タウル、カウカスの峯、トルコの國、インド、ガンジスの流さへ、われを汝より引きはなし、燃ゆるわが陶鎖めんや。

四。天の御子、わが大君。遠き國々知るす君。黄金豊かに權勢強くとも、汝が玉座の前に誓はん。汝が富と榮光も、粧ひこらせる汝が姫達の、いかに美しくとも、わが少女には比ぶべき。

五。虚榮のうてなも、寶滿ちたる國も何かせん。うつし世にてわれを慰めんは、たゞ一つなり憶れの、わが貴しき花の少女の、清き愛の情のみ。われ等こそ相慕ふなれ。彼女はわれを。われは彼女を。

この歌はケンプエル自身が自分の作つたものだといつてゐるが、彼が果して即興的に詩を作りうるやうな才能をもつて

ゐるかどうか、私には疑はしく思はれた。併し第四聯に於て君主を天子と呼ぶが如きは、西洋の詩にはない考へ方であつて、頗る東洋的である。さうするとケンプエルが日本へ來てから東洋思想を取入れたものであるに相違ない。彼が豫めさういふ詩を用意して行つたものか、或は大奥に於て即興的に作つたものかはわからない。兎に角この詩はケンプエルの自作と見なければならぬ。併し私は私見を確證するために、書を以てこの方面に造詣の深い京都の獨逸研究所長のトラウツ博士に質して見た。博士は初めケンプエルが詩を作つたといふことは未だ曾て聞かぬから、この詩はケンプエルが學生時代に何所かで覺えたものであらうといふ返事をよこされた。私は更に一層私見を詳説して再びこれを質した。その後間もなくトラウツ博士から、ケンプエルにはなほ露西亞滞在中に作つた詩のあるが判つたから、前の詩もケンプエル自作に相違ないといつてよこされたので、私の疑問はこゝに始めて氷解した。

その翌年第二回の江戸参府の時にも、ケンプエルは大奥に於て同じやうに歌曲と舞踏を所望されたので、今度は終りの方を多少變へて誦つて見た。將軍はこの時その歌の意味をきかれたので、まさか將軍の感も到底我が愛する花の少女の



魅刀には比べられないといふ意味だと答へかねたから、將軍と御一門の方々の祝福を神に祈つたものと誤魔化してしまつた。

斯くの如く江戸の大奥に於て見世物扱ひにされることは、和蘭人一行にとつては非常に不快なものであつたに相違ない。これは天和二年（一六八二）クライエル参府の時から始つて、享保十一年（一七二六）まで続いた。ジーボルドが文

政九年（一八二六）参府の紀行には斯う書いてゐる。將軍謁見の儀式が終つてから、我等は非常に幸福であつたといはなければならぬ。何となれば、かのエンゲルベルト・ケンプエルが記したやうな竹の簾の後に藏れた幕府大奥の人々の前で芝居じみたことを演ずることが廢止されて、我々はそれをやらすにすんだからである。これを見ても、特に教養の高い醫師にとつてはどんなに苦痛であつたかゞ想像される。